20250413　朝礼拝　ゼカリヤ書９章９〜10節

「平和の始まり」

見よ、そこにあるのは、口汚く罵る群衆と、砂に霞む死への道。

罵声と砂塵の、暗澹たる道にあって、なお輝きを失わない後姿が、ゆっくりと頂きに向けた一歩を刻む。

その輝きが秘めるのは、赦しと希望であり、どんな罵声も、その赦しを覆すことはなく、いかに砂塵が吹き荒んでも、その希望を隠すことはない。

目指すは、罪深き丘の頂上。

赦しと希望を携え、歩む先にあるのは、死であるはずなのに。全てを無に帰す、命の終わりであるはずなのに。神は、その一歩一歩を、涙に濡れた瞳で見つめながら、最愛の者の苦しみを止めようとはしない。

子殺しの汚名を、自ら負うことを厭わなかった神。

その神を信じ抜いて、心と身体が貫かれる痛みを選び取った輝きの子。

どう理解しても、苦痛と悲劇でしかない、この受難物語が、それにも関わらず、伝えようとして

いるのは、未だ成し得ぬ、平和の実現。

耳に刺さる嘲りの声が響き、乱れる呼吸が砂を口に運び込む。そうして目指す、頂きにあるのは、身体を貫く釘と槍。忘れられない、あの日。侮辱の上に、さらに苦痛の覆いを被せられ、流血の最後を迎えても。なお目指すのは、私たちの平和。

分かり合えず、許し合えず。自らの価値や水準を他者に押し付け評価し合い、成長と発展の名の下に求め合い、奪い合う社会にあって。私たちが夢にまで見る、平和な世界。

分かってもらえなくても、分かろうとして跪くことをためらわず。

許してもらえなくても、赦そうと重たい十字架を背負い。

神の位にありながら、落ちぶれる愚者と弱者に寄り添うことを求め。

成長と発展に目もくれず、ありのままの姿を認めて、愛を注ぎ。

奪い合うのではなく、与え合うことを実践された、我らの主イエス・キリスト。

賢さと利することを求めるこの世界にあって、愚かにも死を選んだ。

本当に愚かで、この世の栄光を捨て、十字架へと歩まれた。利口な言い訳も、巧みを極めた計画も考え付いたはずなのに。私たちなら、命を懸けてそうするはずなのに。イエスは、そうはされなかった。賢く利口な私たちが決して選ぶことの無い手段を、イエスは選ばれた。

利口なはずの私たちが心に留めるべきは、愚かな、しかし輝き、赦しと希望をもたらすその姿。ひ弱なロバに乗ってやってくる、平和の支配者。知恵と力では成し得ぬ平和を実現される神の子が、今日、来られる。

なんていう詩が伝えようとしている、神様とイエス様の愚かな行いがあるわけですが、それを否定したり、拒絶したりできない現実は、まさに私たちの生きている世界が証明しています。愚かでしょう、馬鹿馬鹿しいでしょう。でも、今や当たり前のように理解されている、基本的人権や、資本主義、民主主義の考え方の基になっているのは、キリスト教の精神です。つまり、イエス様が愚かな十字架で死なれたことで残された福音と神学が、今の社会を下支えしています。それは、もう、そういう世界に生きている何億という人がいるわけですから、今更、否定したくともできるものではありません。「この世はみな神の世界」なんて、讃美歌の歌詞がありますが、主イエス・キリストの御受難を抜きにして、この世界は、多分、成立していないでしょう。イエス様の犠牲は、この世界の基となっていると言えます。確かに、未だ完璧な平和は訪れていませんが、でも、まだ不完全ながらも、主の十字架によって形作られた世界で、私たちは、日々の幸いを得、大切な人と笑い合う毎日を過ごしています。少しずつ、三歩進んで二歩下がるような歩みですが、少しずつ、少しずつ、主の備えられた平和への道は進んでいると、私は信じています。

「わたしはエフライムから戦車を、エルサレムから軍馬を絶つ。戦いの弓は絶たれ、諸国の民に平和が告げられる。彼の支配は海から海へ、大河から地の果てにまで及ぶ」。残念なことに、未だ、エフライムとエルサレムを含むユダヤ・イスラエルから争いの炎は消えていませんが、つまり、この預言の成就は、まだ見ぬ未来に求める他ないわけですが、それでも言えるのは、さっき伝えたように、この預言はキリスト教に受け継がれ、イエス様の御受難を経て、世界中に伝播していったと

いうことです。「諸国の民に平和が告げられる」。まだその途上であるとしても、そういう未来像が、夢が与えられている。海から海へ。地の果てまで。平和の夢が与えられている。その預言であり、福音があることは、しっかりと受け止めていたいと思います。

平和ではない現実を知るからこそ、争いが絶えない理由を弁えるからこそ。軋轢と戦争の中で語られた、このゼカリヤ書の預言に、私たちも耳を傾けていたいと思います。忘れちゃならないのは、戦争が無くならないから、私たちは平和を叫ぶということです。福音を語るということです。「主の平和だ、イエス様の赦しだ、神様の愛だ、なにを、この世知辛く、争いの絶えない世界にあって、何を甘ったるいこと言っているんだ」と思わるかも知れません。いやいや、だからこそ、甘ったるいことを言うんですよ。愚かな主の十字架を宣べ伝えるんですよ。2000 年前から、どんだけ賢く、知恵をつけ、ＡＩだって、生命だって、神の領域と呼ばれるところにまで踏み込んで、なお。家族と和解できず、隣人と争うこともあり、社会の不平不満を解消できず、世界の平和も実現できない。だから、甘ったるいことを言うんです。愚かな主の十字架を宣べ伝えるのです。それが、キリスト者の務めなんです。

知恵と力では成し得ぬ平和を願うからこそ、祈りと賛美という愚かな手段を、あえて選ぶ。主の十字架に望みをかける。

「高ぶることなく、ろばに乗って来る。雌ろばの子のであるろばに乗って」来る。そんなイエス様に望みをかける。愚かでしょう、馬鹿馬鹿しいでしょう。でも、賢く利口な私たちの発想では、平和は、まだまだ程遠い。今まで重ねてきた経験、培ってきた才能、被ってきた苦節、掴み取った成功。それらは決して、卑下されるものではないけれど、しかし、それらを主張し、誇ることで得られる平和があるのか、どうか。「高ぶることなく、ろばに乗って来る」というイエス様に、私たちは自らの実績を誇って、アーメンと言うのでしょうか。

受難節、受難週です。イエス様の御苦しみに思いを馳せる最終週です。イエス様の痛みを思うなら、苦しみを思うなら。私たちが心に留めるべきは、私たち自身の至らなさです。プライドです。こだわりです。人の世では、称賛され、憧れ、欲しいと思われるすべての輝きを、一旦忘れることです。卑下する必要はないけれど、主の御前にあって、自分の誇れることを、一旦忘れてしまう。それが、受難節、受難週において、私たちに必要な営みであると、私は思います。

イエス様は、大群衆が待ち構える首都エルサレムに、ろばに乗ってやってきました。現代風に言えば、ロールスロイスや、レクサスや、クラウンじゃないんです。軽トラみたいなもんなんです。その愚かさ、稚拙さ、貧しさが、私たちの信仰と、生活と、社会と、世界を下支えしていると思うなら、私たちも、その愚かさに倣って、いつも謙虚に、柔和に、寛容に、キリストの香りを放つものでありたいと願います。イエス様の死を無駄にしないためにも、十字架による平和を実現するためにも、残り 7 日の受難週。縮こまって聖なる悲嘆に暮れるのではなく、外に出て笑顔で人に尽くす、そんな 1 週間になれば良いのかな、と個人的には思っています。イエス様と神様の想いを汲んで、隣り合う一人一人を元気にさせる、そんな 1 週間にしてみましょう。そして、小さな平和を噛みしめながら、次週イースターを共にお祝いしたいと思います。最後にお祈りを致します。

神様。今日も、争いや諍いや不和が絶えない中で、私たちのことを特別に取り分けてくださり、この聖なる場所へと導いてくださり、感謝致します。祈りと賛美を通して、ちょっとだけ平和な気持ちを取り戻している私たちがいます。どうか、神様、この礼拝によって再び与えられた平和への想い、遜る信仰によって、それぞれの帰るべき場所、派遣される場所で、私たちがキリストの良き香りを醸すことができますように。平和の使者として、相応しい振る舞いを為すことができますように。どうか、支え導いてください。御子の死を悲しみ、自らの罪を痛々しく思う信仰によって、むしろ、隣人を笑顔にさせ、社会を明るくする、そんな 1 週間を創り出すことができますように。

このお祈りを、我らの輝きの主である、イエス・キリストの御名前によって、あなたの御前にお捧げ致します。